
リアルライフ

黒木露火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リアルライフ

【Zコード】

Z2513F

【作者名】

黒木露火

【あらすじ】

【空想科学祭参加作品】幽霊が出る、データが残つていれば死んだあとでも《リアルワールド》の中で生きてけるなどという不吉な噂が電腦空間にはあつた。友人の死の謎を解くために、主人公は死んだはずの少女を電腦空間に追い求める。（全4話）

Real 1（前書き）

本作品はフィクションです。実在する団体・人物とは一切関係ありません。

ログインしたユーザーの、閉じられているはずの瞳に最初に映るのは、リアルワールドへようこそ という青い文字。

他になにもない一面の白い世界の中、水面のように静かに揺れて空中に浮かぶその文字に触れると、ふいに街の雑踏が聞こえてくる。瞼を開けたユーザーは、電話ボックスを模したログイン・ポイントの中にいることに気づく。

ガラスの向こうの街並みと雑踏は、限りなく現実に近い夢 限りなく夢に近い現実。

それが、電腦空間 リアルワールド だった。

佐山浩司は大学を卒業し、リアルワールド の運営会社に入社した。

リアルワールド は十年前の設立以来、順調に業績を伸ばしていた。近年の伸び率は特に著しい。

しかし、そこには一つの不吉な噂があつた。

「ねえ、佐山くん、 リアルワールド に幽霊ができるってホントなの？」

焼き鳥を片手にした牛島の発言に、佐山は怪訝な顔をした。

大学を卒業して初めての飲み会には、同じゼミでも特に仲のよかつた六人が集まつた。

新人研修後、やつと現場に出してもらうよつになり、少し落ち着いた夏のことだった。久々に見るメンバーは皆、以前より少しだけ引き締まった顔をしている。

「俺は見たことないし、そんな話聞いたこともないよ。大体、うちの会社、二年前にできたばつかの新社屋だよ？ 伝説できるには早すぎるって」

佐山は笑い飛ばしてジョッキをあおる。

「だーれが会社つづつたよ。中だよ中。ゲームの中」

佐山の後頭部を軽く叩いて、左の席に着いたのは園田だった。〇 A機器の営業部に配属されたというだけあって、どんなときでも威勢がいい。

「ああ、でも俺も聞いたことあるよ、その噂」

右隣の、特に仲のよかつた本村が冷酒を口に運びながら言った。
住所が近いこともあって、今でもたまに食事をしたりするものの、
そんな話をしたことはない。研修で疲れきっている佐山にはわざと
その話をしなかつたのであるう。気遣いが今更ながら身に染みた。

「そんなに有名なんだ。でも リアルワールド はバー・チャルリア
リティなんだよ？ そんな大きなバグは考えられないし、意図的に
プログラミングしたのでなければ幽霊なんてありえないね」

〇と1で完全にコントロールされた世界に、そんな不確定なものが存在する余裕はない。

「幽霊じゃないけど、うちの学校でも噂が出てるわ。 リアルワー
ルド で死んだはずの人間を見たって」

木之下は高校の教師になつた。一緒に赴任した同じ新任の指導力
のなさを、さつきまで嘆いていた。

「一昨年、自殺した女の子がいたらしくんだけじ、その子の姿を去
年美術の授業中に リアルワールド の中で見たつて生徒がいて、
登校拒否になつてるのよ」

リアルワールド の中では、データ化された歴史建造物を自由
に歩くことができ、美術品や工芸品にも気兼ねなく触れることもで
きる。そのため、美術や歴史、地理の授業に使われる機会も増えて
きていた。

「そんな噂が広がると困るよ。せっかく教育向けのオブジェクトも
揃つてきたつていうのに」

「根拠がないのがはつきりしたらこっちもそのつもりで対応できる
から、何かあつたら教えてよ。でも、私は国語科だからあんまり関

係ないけどね」

木之下は舌を出した。まじめかと思えば案外お気楽なところせ、社会人になつたくらいでは変わらないようだ。

「俺も会社で聞いてみるよ。なんかわかつたら、連絡するから。そんなやりとりを思い出したのは、飲み会から数日経つたある日のことだった。

佐山の仕事場は、カスタマーサービス部。いわゆるサポセンである。

研修を終えて以来、三か月はまずメール、次の三か月は電話での対応に追われる毎口だ。

気がつくと、電話で謝りながら実際に頭も下げるようになつていた。客には見えるはずもないのにと、苦笑いすることもある。

ストレスは溜まつたが、この経験がやがて実際のリアルワールドの中でのサポート業務へと繋がると想つと、それなりのやりがいも感じられるものであった。

その日も佐山はエアコンのきいた室内で、冷や汗とこづねの汗を多量にかきながら客との対応に追われていた。

「はい。リアルワールド カスタマーサポート担当の佐山でござります。ご用件を承ります」

最初の頃は舌を噛みそつた部署と自分の氏名も、今では家の電話をとるとともうつかり名乗つてしまいそうなくらい馴染んでしまつた。

「…………あのう」

若い女の子の声だつた。若いといつより幼いくらいの。それつきり黙つてしまつた。

電話からは雑音が聞こえないので、家の電話なのだらう。中学生が高校生か。

「はい。どのよつな」「用件でしようか？」

明るく、しかし急かさないよつこ、少しうつへつと応対する。

「ええと……」

言いくにふさうとしている。

「あのう……プレイヤーが死んだ後も リアルワールド では生きていけるって、ほんとですか？」

「は？」

思わず佐山は返答に詰まつた。そんな突拍子もない質問に当たつたのは初めてだつた。

とりあえず検索をかけようとして、キーワードをなんとしたものが悩んでしまう。そして思い出したのが先田の飲み会のときの話だつた。

『幽霊』とPCに入力してエンターキーを押す。候補に上がつたのは二十一件の過去の問い合わせ。その概要を見ると似たような質問も入つていて、全て「処理：秋山課長」となつている。

「少々お待ち下さい」

保留にして、タイミングよくレポート作成中だつた隣のブースの山部に小声で聞いてみる。

「山部さん、『プレイヤーが死んだ後、リアルワールド では生きていけるのか？』っていう問い合わせ入つてるんですけど、これは課長送りでいいんですね？」

ベテラン契約社員の山部は三十代の女性で、このフロアでは一番古く、応対もしつかりしている。その山部が肯いたので課長の秋山を呼び出す。同時に聞き取つた質問内容のデータも送る。

「他の詳しい者に代わりますので、もう少々お待ちください」
断わりを入れて再保留になるとほぼ同時に、秋山が引き継いだことをPC画面で確認した。ほつと安堵の息をつく。

すると隣の山部がキー・ボードを叩きながらぼそぼそ語りかけてくるのが聞こえた。

「最近、変な質問多くなつてるみたいなのよね。そろそろ警戒対象に入ると思う、その手の質問」

「ありがとうございます」

小声で礼を言つてPCに元田をやると、わざと検索をかけたデータ

がそのまま表示されている。

これまでの報告書を見ても、どの対応も一言でいづなら「そのような事実はありません」だった。実際の言い方はもつと違うのだろうが、秋山のような上の人間が出てくるのなら面倒な何かがあるのだろう。それが何かは気にはなったが、調べてもこれ以上の何かわかるわけでもない。

木之下には「やっぱり事実無根だった」と家に帰つてからメールすることにして、佐山は業務に戻ることにした。

九月になり、やつと残暑も抜けてきた土曜日のこと。

佐山が八時までの遅番を終えて、携帯をチェックするとメールが四件届いていた。

メールをチェックしてみる。

「久しぶり。元氣か？」

「今日、仕事？」

「食事でもしないか？」

「連絡をくれ」

差出人はすべて本村。市役所に勤務する本村は土曜日は休みのはずだ。サポセンに配置になつてからは変則勤務になつて休みが合わないため、近況報告の軽いメールだけでしばらく会つていなかつた。「なんか急用でもあつたかな?」

少し考えて、メールではなく電話を掛けてみることにした。呼び出し音の後、留守番電話に変わる。

「あ、俺だけど、なんか用だつた? 今、仕事終わつて明日は休みなんで、いつでも連絡ください」

メッセージを残して切つたが、本村からの返事が来たのは結局翌日午後になつてからだつた。

待ち合わせの近場のファミレスに行くと、彼は窓際の席で眠り込んでいた。起こすとか起こすまいながら、向かいの席に座ると同時に彼は目を覚ました。

「どうした？」

「先月、園田なんかと飲んだときに、変な話があつたじゃないか、リアルワールド のことで。あれ、どうなつた？」

妙なことを聞くと思いながらも、木之下に事実無根だつたというメールを送った顛末を語つた。本村は神妙な顔で聞いていたが、目の下の隈が、普段から規則正しい生活を送つていたはずの彼らしくない。

「それで？ リアルワールド がどうかしたのか？」

注文した「一ヒー」が来て、なかなか話だそうとしない本村を佐山は促す。

「あれ、本当だつた」

「あれつて？」

「リアルワールド では死んだ人間が生きているつていう話」

「はあ？」

突拍子もない話に佐山は驚きを隠せない。しかし本村は気にせず続ける。

「昨日、たまたまりアルステーションの前を通りかかったとき、店頭のデモ画面で見たんだ。高校のときに死んだはずのミホが交差点を歩いていくのを」

リアルステーションはリアルワールドの直営施設で、契約手続きの他、データ作製も行う。

ビジターと呼ばれるビギナー向けデータ作製には、前面と背面の写真が一枚あればよい。あとは登録画面で身長と体型を選択するだけで、コーナー本人というよりインターネットで使われるアバターの感覚に近い。

インターフェイスもゴーグルと触覚再生用のグラブだけという手軽で簡単なものだ。学校の授業などでもよく使われている。

もう一つのレジデントと呼ばれる一般コーナー登録をするには、リアルステーションに出向く必要がある。

3D写真で全身像を撮影、解析し、そこからデータを起こしていく。もちろん多少の修正は効くようになつていてるのだが、あまり極端なものは感覚の再生を犠牲にするので、勧められてはいない。個人別にできるだけリアルな感覚が再生できるように、ヘッドセットの調整も行われている。

「で？」

「そのままステーションに入つて、契約してコーナー登録も済ませた」

疲れた顔の本村が満足げに答える。

「それはそれはご契約まことにありがとうございます」

佐山は思わず丁寧に頭を下げてしまった。

リアルワールド の備品はすべてレンタルになつていて、持ち帰れば契約したその日からプレイできるようになつていて、持ち帰つてから、寝ずにプレイしていに違ひない。

「でもお前、ゲームはほとんどやつてなかつたじゃないか。何のためにリアルワールド なんかやつてるんだ？ なんかつて社員の俺が言うセリフじやないけどさ。その子に似た子を探すためか？ どうせ他人の空似なんじやないのか？」

「コーヒーが冷めているのに気がついた佐山は、一口含んでその苦さに顔をしかめた。

「制服が、同じだったんだよ」

かすかに震える声で本村が続ける。

「高一の夏から彼女が死ぬまでの一年間、つき合つてたんだ。見間違えるはずがないじやないか」

俯いているのは涙をこらえているからとこいつのは考えすぎだらうか。

「自殺したんだ、彼女。死ぬ前に俺のところに電話をかけてきた。
『私、生きていてもいいのかな』って。俺……なんて言つたらいいかわからなくて黙つてた。そしたら翌日死んだんだ。手首を切つて。今でもあの声、憶えてるよ」

女子に比較的人気があつたにも関わらず、大学時代、本村は誰ともつきあおうとはしなかつた。グループでの行動は避ける気配がなかつたから、女性嫌いというわけでもないと思っていたが、そんなことがあつたとは。

重すぎる話に、佐山は冷めたコーヒーをまた口にするしかなかつた。

「どう見ても彼女だつたよ。ミホだつた。あれは」

「……で、本村。お前、その子を リアルワールド の中で見つけどつするんだ？ 女性コーディー、特に十八歳以下の子にしつこく迫るとアカウント即削除されるんだぞ」

「わかつてゐよ」

「それに リアルワールド は所詮バー・チャルだ。これも社員の俺が言うことじやないけど、現実じやないんだよ」

「わかつてゐよ。ただ、どうしても彼女に会いたいだけなんだ。もう一度」

テーブルの上につづくまるようにして嗚咽する友人を正視できず、佐山は窓の外に目をやつた。

しばらくは毎日電話やメールで本村の様子を確認していた佐山だったが、十月に入り、部署が変わつて忙しくなるとそれも週に一、二回に減つていった。

もともとゲームなんてまるでやつてなかつた男である。普通のゲームのようにイベントの連続をこなしていくものならともかく、一種日常生活の延長のような リアルワールド にはすぐ飽きてしまうだろうといふ予測もあつた。

しかし、アパートの隣家のキンモクセイが咲いた日、香りに起されたるよつと目覚めた佐山が目にしたのは本村からの最後のメールだつた。

「見つけた。やつぱり彼女だ」

履歴は午前三時すぎ。

平日のことだから、役所の仕事には差障りがないはずがない。

「あのバカ。まだ諦めてなかつたのか」

イライラしながら電話を入れる。まだ早朝だから家は出でていないはずなのに、応答はない。留守電にもならない。

不吉な予感がしないでもなかつたが、まさかという気持ちが勝つた。

セールスか何かだろうと無視するつもりだったが、今まで携帯にそんな電話はかかつってきたことがない。妙に気になつて、人のいい休憩室で伝言を再生してみる。

録音されていたのはまるで聞き覚えのない男の声で、本村が死んだということ、自分は警察官で亡くなつた時の状況を知りたいので

電話が欲しいといつこと。そして、連絡先の電話番号だった。

「嘘だ……悪い冗談だらう?」

本村の携帯に電話を入れて聞いてえたたのは、「この電話は電源が入つていなか、電波の届かない場所にあります」といつおなじみのアナウンスだった。

信じられなくてまたかけてみると。「この電話は」で反射的に電話を切つた。

電話をしなければと、伝言を何度も聞いても電話番号をメモできない。佐山はそれで自分がどうしようもなく動搖していることに気がついた。

やつとのことで書きとめた番号に電話を入れてみると、やはり警察だつた。

まず、解剖の結果、本村の死因が衰弱死だったことが告げられた。「亡くなつたのは今朝の四時くらいのようですね」

「どうして……」

ひょつとしてあのメールが届いてすぐに気が付いていたら、本村を助けられたのではないかと一瞬思つた。激しい後悔だった。

本村も恋人を亡くしたとき、きっと同じような思いがあつたに違いない。その冥い遺産を引き継いでしまつたような気がした。

言葉に詰まつた佐山に、武中と名乗つた刑事は氣の毒そうに続けた。

「リアルワールドってご存知ですか? 飯も食わんとゲームをやつとつたんですね。勤務先の役所のほうはこの一週間ばかり無断欠勤しどつたそうです」

「そんなまさか。あいつは無断欠勤なんてするようなやつじゃないです。それに リアルワールドには六時間の時間制限がついてるんですよ。その後は一時間のインターバルを置かなければ再ログインできないはずです」

「それがですねえ。ヤミソフトというんですかねえ、リミットブレーカーちゅうのを使ってまして、うちのそういうのに詳しいのが履

歴を確認したら、九十時間くらいたゞつとぶつ続けてゲームやつとつたらしいです

「コノットブレーカー、ですか」

「ほり昔、中国の若者がゲームのやりすぎで死んだことがあったでしょう。あれがやっぱり九十時間近かったそうで、何事もやりすぎはいかんということでしょうなあ。で、本村さんの最後のメールの内容ですが。『見つけた。やっぱり彼女だ』って何のことかおわかりになりますか?」

「高校のときに会つてた彼女だそうです。自殺した」

「はあ」

刑事は訳がわからないと言いたげに気の抜けた声を出した。

「その女の子に似た子を リアルワールド の中で見たからつて、探してたみたいなんです。もう リアルワールド なんか止めて、元気で普通に仕事してるとばっかり、思つてたのに……」

何も知らなかつた悔しさがつぶやきになつた。

「事件性は……やはりないようですねえ」

「愁傷様です」という言葉を残して、刑事の電話は切れた。

まるで会わせてくれたようにそのまま休日だったので、佐山は通夜ではなく本葬に出席することにした。

本村の実家は車で三時間ほど離れた田舎町の一階家で、斎場ではなく自宅で執り行われた葬儀には佐山の他に、園田と木之下も申し合わせて参列した。

一人息子の不条理で突然の死に、佐山の親よりも若いはずの本村の両親は憔悴しきつて老けて見えた。その横で氣丈そうに頭を下げる女性に、佐山はそつと声をかけた。

「本村君のお姉さんですね?」

肯いた女性を棺を安置してある座敷から連れ出し、この度はと頭を下げる。

「お姉さん、本村君が亡くなつた理由を警察からお聞きになつましたか?」

「ゲームをやりすぎたとか、信じられないです。あの子、ゲームなんか興味なかつたのに」

納得いかないと言つように頭を横に振る本村の姉に、佐山は自分の知つてることを話した。

「ミホちゃんを？ 幻でも見たんでしょうか？」

「それを確かめるために、僕もそのミホさん……に似た人物を探してみたいんです。写真があつたら見せていただけないでしょうか？」

厚かましいお願いで恐縮なのですが

さすがに自分が リアルワールド の社員であることは言えなかつた。

「それならあつたはずです」

ちょっと待つてと、本村の姉は二階に上がつていった。すぐに戻つてきたのは、佐山が遊びにいったことのある本村の部屋と同じで、彼が使つていた部屋は整理が行き届いていてアルバムも探しやすかつたからだろう。

「これです。うちにあつても、もう見る人もいない写真です。お持ちください」

「ありがとうございます」

差し出された写真には、セーラー服の少女がピースサインで写つていた。肩までの髪に泣きぼくろ。撮つたのは恐らく本村だったのだろう。実にいい笑顔だった。

佐山は写真を喪服の内ポケットに丁寧に仕舞つた。

本村も彼女の後を追つたようなものだ。何年も遅れてしまつたけれど。

読経の中、泣きたいのになぜか涙は出なかつた。

昼も仕事で夢を見て、夜は夜で夢を見る。リアルワールドと
いう名の夢を。

そのかわり、佐山は本当の夢を見ることはなくなった。気絶する
ように眠りにつき、目覚ましのベルで起こされる。

本村が死んで一ヶ月が経つた。泣きぼくろの少女はいまだ見つか
らない。

年末間近になって集まった人数は四人と、本村を除いても夏より
減っていた。雪になりきれない雨が店の外をじくじくと濡らしてい
る。

「お前、妙に律義なところがあるからなあ。同期でデータ管理に行
つてるやつとかいないのか？」

一時間遅れてきた園田は、どこか疲れた顔で鍋をつつぐ。

「うちもだけど、プライバシーマークとつてるとこも多いし、IT
業界はそういうのは厳しいんだよ。ユーザーの個人データだけじゃ
なくてログも個人情報にあるから、社員とはいえ部外者は立ち入
れない部署だし、コピーするのはたとえ親の頼みでも無理って言わ
れたよ。ましてや同期程度じゃね。結局何もできないんだよな、俺
酔いのせいが、いろいろなことがつい口に出た。

「本村くんが死んだのは、佐山くんの責任じゃないでしょ」

「そうよ。できるだけのことはやつたんだし、もういいんじゃない
？」

木之下と牛島の二人が交互に慰める。

「でも、本村は最後に……」

佐山はポケットの中の携帯を握りしめた。

「見つけた。やっぱり彼女だ」

そのメールは今も消せずにメモリの中に残っていた。

「あらあ、珍しい人がいる」

出勤前の会社近くのコーヒー店で声をかけられた。十一時の店内は客も少ない。

「あ、山部さん。お久しぶりです」

「うー、いい?」

トレイを持った山部に聞かれて、佐山は頷いた。

十歳以上離れているであろう山部には、他の若い派遣社員のように佐山を異性として意識しているようなぎこちなさはない。気軽に話せる近所のおばさんのような雰囲気があった。パートを椅子にかけて、山部は遠慮なく佐山の向かいの席に座った。

「十一時からのシフト?」

「ええ。山部さんも?」

「そうなのよ。これから戦の前の腹^ごしり^りえ」

山部のトレーにはサンドイッチとカフュオレが載っている。

「どう? 管理課は」

「うーん。結構大変なんですが、傍田には寝てるようしか見えませんね」

「やつぱり」

山部は笑った。

サポセンと現在佐山がいる管理課はフロアが違うので、派遣社員の山部にはよくわからないことも多いのだろう。いろいろ質問をしてくる。

「あそこは一十四時間体制でしょうか? シフトはどんな感じになつてるので?」

「タイムコマットもあるので、実際 ワールド の中に入っているは六時間ですね。あとは引き継ぎとか報告とか、そんなんで潰れます」

「ワールド 内には誰かいなきやいけないから、みんな一斉に入れ替わるわけじゃないんでしきつ?」

「そうですね。三時間ごとにシフトは区切つてあるから、半数ずつ交代していくって感じです」

「じゃあ、夜中の勤務とかあるわけ？」

「ありますよ。一週間交代で三時間ずつずれていくんです」

運営管理部管理課はサポセンで上がつてきたクレーム処理が的確になされているか管理する部署で、リアルワールドの中での業務がメインになる。その業務内容から部内では『現業』と呼ばれていた。

「そつちのほうはどうなんですか？ 变な質問は相変わらずですか？」

佐山が逆に質問する。まとめたレポートなら読んでいるが、部署が違うために細かいデータまでは見ることができない。

「ホームページのFAQで明確な否定文載せてから少なくはなったんだけど、相変わらず来るのよ。FAQ読まないバカなユーザーから」

「そういうのは秋山課長に回してるんですか？」

佐山は何度かエレベーターで挨拶したことのある、秋山のことを思い出していた。まだ若いが切れ者という噂がある人間らしく、鞘に入った目に見えない日本刀を笑顔と一緒にぶら下げているような雰囲気があった。

「ううん。今はオペレーターが普通に対応してるので、否定してる」

「そうですよねえ」

あははと一人は声をあげて笑つた。

「でもね、ネットサーフィンが趣味の友だちに聞いたんだけど、メンタルヘルス系とか自殺系のサイトにはやたらあの手の書き込み多いみたい。質問つて形でね。あなたの会社大丈夫って聞かれたけど、お前の頭こそ大丈夫かと言いたかつたわ」

とほほと言わんばかりの表情で、山部はサンディッシュにかじりついた。

家に帰つて調べてみると、その手のサイトの掲示板には必ずといっていいほど「死んだ後、リアルワールドで生きられるのか？」という質問が投稿されていた。反応はといえば、「バカバカしい」から「それが本当ならいいのに」「信じれば叶う」といったものまでさまざまはあるが、結論らしきものはない。

今度は『リアルワールド』『自殺』のキーワードでインターネット全体を検索してみる。すると、今度は心霊系サイトが大量にひつかかってきた。

内容は夏に佐山が聞いたのと同じ、「自殺した人間を リアルワールド 内で見た」「リアルワールド には幽霊がいる」というものだつた。

多数の書き込みを見ていて、佐山はふと違和感を感じた。心霊系のほうは噂話と目撃情報が主で、書きこんでいる人間もばらばらなのに対し、メンタルヘルス・自殺系は質問者のHなやちよつとした言い回しや語尾は違うものの内容はほぼ同じなのだ。

直観した。これはロボットだ。

自動的に書き込みを生成するロボット・プログラムを使って、誰かが故意にそういう噂を流している。そして、複数の「幽霊」が実際に目撃されているらしい。

誰が？ 何のために？

園田に相談してみようかとも思つたが、そう言われても何も答えられない現状では話にならない。

タイトルだけ書いた園田宛ての携帯メールは消すことにして。本村も自分宛てのメールを出さなかつたことがあるのだろうか、こんな風に。

佐山はそんなことを考えながら、「作成中のメールを破棄する」を選択して決定ボタンを押した。

座標やマップがあつても、思考は視覚的な情報に惑わされる。

泣きぼくろの少女を探してあちこちをさまよつたおかげで、佐山はリアルワールドの中については同じ部署内では誰にも負けないほど詳しくなっていた。おかげで作業時間は予定よりも早く終わる。

その余つたちよつとした時間を使って、佐山は情報収集するようになつた。コーナーもスタッフ相手ならば気軽に話してくれることが多い。

とはいへ、「幽霊」に関するコーナーからの生の情報はなかなか得られなかつた。

いくつかの心霊系掲示板を定期的にチェックしても、「幽霊」の出現情報はせいぜい一か月に一、二件。ビジターとレジデンントを合わせた リアルワールド のコーナーは五〇〇万人を突破している。実際の目撃者を捕まえるには自分の方法が効率が悪いということは、佐山にもよくわかつていた。しかし、業務と関係ないことなので、表だって動くわけにもいかない。

地道にやるしかないといふことが分かつていても、焦燥感は疲労となつて佐山を蝕んでいった。

「よう、まだ働く気か？」

帰つたはずの佐山が戻つてきたのに気づいたチーフの野間は笑つた。

擦りガラス風プラスチックのパーテーションの向こうは暗く、等間隔にモニターだけがぼんやり光つているのが見える。そこでは同僚たちが リアルワールド にアクセスしているのだ。

「忘れ物、ありませんでしたか？」

「忘れ物？ 何？」

何台も並んだモニターの後ろから野間が出てきた。親分肌で氣さくな野間は後輩たちの面倒もよく見るので慕わっていた。

そのため、シフトがばらばらな管理課を実質まとめているのは、プログラマー出身の神経質そうな課長ではなくチーフの野間といった。

「緑色のシステム手帳、見ませんでしたか？」

「あ、ああ？ あれ、佐山のなんか？」

ひどく驚いた様子で言つ。

「ええ、僕のなんです」

「しまつたなあ。あれ、サポセンに持つていつしかつたよ。秋山んのだと思つて」

「え？」

怪訝な顔をする佐山に野間は言つた。

「だつて秋山の妹の写真が入つてたから、てつきり秋山のかと思つたんだよ」

今度は佐山が驚かされる番だった。

まもなくして、手帳を持つて帰つてきた野間は微妙な顔をしていた。

「秋山いたよ。さつきはいなかつたなんだけどさ。『めん。手帳の中身、見られちゃつたみたいだ』

「これで勘弁してくれと、野間は温かい缶コーヒーを佐山に渡す。

「ところで、なんで秋山の妹の写真を持つてたんだ？」

モニターの向こうに引つ込んだ野間は、立つたまま自分の缶を開ける。炭酸独特のプシュッという音がした。

「僕も誰だか知らなかつたんですよ」

少し迷つて缶を開けた。

「あの写真、この間事故で死んだ友だちが持つてたんです。 リアルワールド の中でのあの女の子を探しているつて言つてたから、見かけたら友だちが死んだことを伝えようと思つて」

甘いコーヒーは少しだけ噾の味がした。

「見かけたつていつの話だ？ だいぶ前のことだろ？」

「いえ。今年になつてからです。夏くらいだったかな」

「それは妙な話だなあ」

「妙つて？」

「彼女は亡くなつてるんだ。確か五、六年も前だぜ？」

モニターを覗き込んだ野間の顔が、モニターの明るさで下から照らされている。

「またまた。野間さん、冗談はやめてくださいよー」

「いや、それがマジなんだよ。秋山と俺って実は同期なんだけど、バージョン3から4に変わるとき、データとりのために社員の家族の協力も募つたわけ。そんときに秋山の妹も参加したんだけど、それから割とすぐ後に亡くなつたって聞いたなあ」

「事故、とかですか？」

「うーん、これ言つていいのかなあ、と渋りながらも「自殺だつたらしい」と野間は教えてくれた。絶対誰にも言つなよ、を付け加えて。

「そういうわけで、彼女のデータが残つてるわけないんだよ。コーナーが亡くなる=退会=データ削除つてことなんだからさ」

「でも、最近ネットで変な噂が立つてんじゃないですか。リアルワールド の中で死んだはずの人間に会つた、みたいな」

あれか、と野間は渋面を作つた。

「なんか変な噂が流れてるよな。もちろん、そんなことあるわけないんだけど、上のほうも困つてるみたいだよ。ここだけの話だけど、コーナー死亡による退会というケースがここ半年ばかり増えてきてるらしい。しかも、入会して一、二ヶ月後の若年者が多いらしい。死因まではわからないが、恐らく自殺だらうな。リアルワールド の中に自分のバックアップを作つたからつて、安心してこっち側の自分を消去してるみたいだつて、登録管理の連中がウソになつたよ」

「これも他のやつには絶対話すなよ、と野間は念を押して仕事に戻つた。

それを期に佐山も退出したが、冷たくなつてしまつたコーヒーは何となく気持ちが悪くて、給湯室で流して捨てた。

少女の姿を リアルワールド の中で初めて見たのは、それからしばらく経つてからのことだった。

普通のユーザーならば、現実では叶えられない夢を リアルワールド の中で実現する。

広い庭で思う存分土いじりをしたり、動物と戯れたり。時間や場所や騒音を気にせず、物を作ったり、音楽を楽しんだり。または、物理的距離を超えて人と交流したり、恋人を作ったり。

そのどれをも望まない佐山は、相変わらず匂いのない街の中をさまよい続けていた。

メインストリートの人混みでログアウト時間になるまで、ぼんやりとあの少女の姿を探し求める。

いつまでやれば気が済むのか、自分にもよくわからなかつた。本村のあのメールが消せないうちは続けようと思つていた。

視界の隅にログアウト十分前の表示がちらつき始めた頃、ふいに彼女は現れた。

見覚えのある制服で、目の前の交差点を横切つていく。目元を瞬時に拡大表示すると、あの泣きぼくろがあつた。

向こうは気づいているのかいないのかわからない。おそらくは気づいていないだろう。

ログアウトまであと八分。

佐山はやつと獲物を見つけた獵犬の喜びで、追跡を始めた。

メインストリートを東に向かう彼女から目を離さないように、早足で追いかける。信号は変わったばかりですぐには向こうに渡れない。

無理に渡ろうとしても、思う存分スピードを楽しみたいユーザーたちが、実在しない車やバイクに乗ってすごい勢いで突っ込んでくる。それとぶつかってしまっても現実にどうなるわけでもなく、即

ログアウトになるだけだが、やつと見つけた獲物を逃がすわけにはいかない。

やつと信郎が変わる。

少女は三十メートルほど先を歩いていく。背後から観察すると、ビジターのちやちな姿ではなく、ちやんとしたレジリントのデータだった。

ログアウトまであと五分。

もう時間は残り少ない。佐山はダッシュした。と、少女はそれに気づいたかのように、ふいに路地に入る。続いて佐山も路地に飛び込むが、すでに少女の姿はない。遠ざかる足音だけがどこからか響いてくる。

「どこに行った？」

ログアウトまであと三分。

「ミミのない妙に清潔な裏路地はどれも似たり寄つたりで、行きつ戻りつしているうちに自分がどこにいるのかわからなくなる。マップを確認しようとしたり、田前に赤く大きなログアウトの文字が表示された。

「ちくしょう！」

ベッドから起きあがつた佐山はヘッドセッテをむしり取ると、壁に投げつけた。大きな音がしてヘッドセットは壊れたが、どうしても現実だと思えなかつた。

それ以来、ログアウトの間近になると、少女はあざ笑うように佐山の前に現れる。

田の前を横切る。ふと見上げたビルの階上からじりじりを眺めている。路地の奥の暗がりに消えていく。

追いかけて、しばらくすると強制ログアウトのサインとともに現実に引き戻される。

何度も何度もループのように繰り返される追いかけっこを続けるうちに、佐山は少女を夢にまで見るようになつた。

いつも田の前でいなくなる。足音だけがどこからか聞こえてくる。

そんな夢を見て、疲れ果てて目覚めると、これが現実なのか夢なのかリアルワールドなのかわからなくなる。

不思議の国のアリスの白ウサギのように、現れては消える死んだはずの少女の悪夢を追いかけていくうちに、佐山の現実感覚はどんどん希薄になつていった。

そして、強制ログアウトシステムさえなかつたら、と思い詰めるようになつていぐ。何を使えばいいかはわかつっていた。

リミット・ブレーク。

どうすれば手に入れられるか、既に佐山は知つていた。他のツールも。

わずかに残つた理性が止めると主張するのを、一度だけという、相手もない約束でねじ伏せる。

ホームページに表示されていた口座に金を振り込むと、ダウンロードのサイトアドレスとパスワードを知らせるメールが届いた。休みの前日を選んだのは、仕事だけが今の佐山を現実と繋いでいることをよくわかっているからだつた。他には何もない。

ログインしてもしばらくは接触してこないことはわかつているが、どこから見られているかもわからない。結局、いつもの通り、メインストリートを中心にぶらつくことになる。

仕事が、少女を捜すためか、そのどちらかでしか リアルワールドに来ることのなかつた佐山は初めて、普通のユーザーたちのように暇つぶしのためだけにそぞろ歩くことを楽しんだ。

約五時間五十分後、見覚えのあるシルエットが視界の端をかすめた。

今までさんざんもてあそばれてきた結果、彼女の行動パターンは知りつくしたと言える。必要なのは追跡する時間だけだつたのだ。

恒例の追いかけっこあと、今回も寸止めで逃げられた、という振りをする。もし彼女がこちら側を探知するためのツールを使つているのなら、仕込まれたはずのプログラムはすべて無効化してあるはずだった。

ログアウト予定時間を経過して、姿の見えなくなつた佐山に気づいた少女は明らかに油断していた。その彼女を追うのは、違法プログラムを使って透明化と無音化を施していた佐山にとってはたやすいことだった。

リアルワールドにおける空間の概念は、現実のものとはもちろん違う。

ドアの向こうが座標として連続しているとも限らないし、ドアの内側がその建物の設計図に見合つた大きさをしていとは限らない。圧縮してしまえば、あるいは別の座標につなげてしまえば、いくらでもオブジェクトは詰め込めるのである。

少女が入っていたビルの一室も、一見普通に見えた。しかし、踏み込んでみるとそこは見た目よりもずいぶん広い、圧縮されたほの暗い空間だった。

そこには田を開じ、あるいは開き、立つたまま静かに並んでいるマネキンの群があった。

いや、人形ではない。人間の、ユーザーのデータだ。

普通はユーザーがログインするとユーザーのパソコンから読みとられたデータを元に形成され、ログアウトすると同時にこの世界から消えてしまうはずのユーザーのデータが、なぜ実在しているのか、佐山には理解できなかつた。

「死者の家にようこそ」

背後から初めて聞く少女の声がする。

「なんなんだ、これは？ 死者の家って？」

「こいつらみんな、死体なんだよ。本人は現実ではもう死んでるの。でもこうやってデータが残つてれば、自分はこっちでは生きていられると思つてるの。バカだよねえ」

くすくすと笑いながら、死者の陰から少女が顔を出した。その彼女も死者なのを佐山は知つていて。そしてその身にまとう日本刀のようなぎらりとした空氣も知つていて。その時はその剣呑さは隠されたはいたものの。

「そういうあんたの本体ももう死んでるんじゃないか。中身は違うんだろうけどね。なんでこんなことするんだ？」秋山課長

「死にたいやつは死ねばいいんだ。無理して生きている必要はない。そうだろう？」

少女の口から聞き覚えのある男の声がした。

「こんなことで安心して死ねるなら、いくらでも死にたいやつは死ねばいいのさ。現実を見据えて生きない人間は、既に死んでいるのと同じなんだよ」

「だからって、死にたい人間が現実で死にやすくするためにこんなことをやってるのか？ そんなことしたって死なないやつは死なないじやないか」

「人間は簡単に死ぬもんだよ。妹もそつだつた。死にたいって言うのを必死で止めて、仕事があつても朝まで話を聞いて。俺は本当に妹を可愛がっていたし、好きだつたよ」

その妹の姿で秋山が言つ。反吐がでそつだつた。

「だけど、妹が死んで俺は思い知つたね。両親にとつては妹がすべてだつたのさ。毎晩泣かれて何もできなかつた。俺が生きていることなんか、あいつらには何の意味のないことだつたんだよ。代わりに俺が死ねばよかつたのか？ 度もそう思つた。だから妹を恨むことにしたんだ。死にたがってるやつもね」

「とんだお子さまだな。こんなことをして楽しいのか？」

「楽しいよ」

「誰もがみんな死にたがってるわけじゃないよ。本村だつて死にたくなかったなかつたはずだ。なのにその姿にだまされて、殺されたんじゃないのか」

「君の友だちは死にたがつたんだよ。俺の妹が死んでから、ずっと死にたがつた。だから死者に惹かれて、追いかけて、死んだんだろう？」そうじやないのか

「もういいよ。戯言は。俺は現実に帰つて、このことを会社に報告する」

「ツミミット・ブレイカーで捨てた現実に舞い戻るというのか。バカだなお前は。とっくにお前の現実なんてなくなつてるつていうのに。」
周りを見てみる。もう戻る道なんてない

いつの間にか入ってきたはずの出口がなくなつていた。
「命が尽きるまで、ここにいるがいい」

秋山の声が響く中、闇が深くなつていった。

気がつくと、携帯電話が震えていた。ぼんやりしたまま出ると、「佐山、お前、いつまで無断欠勤するつもりだ！」

という野間の怒号が完全に現実へと引き戻してくれた。

長く動かさなかつたせいで麻痺したように回らない口で必死に説明すると、野間の声がだんだん真剣になつてきた。

「とりあえず、お前は今日病院に行つてこい。後は俺がなんとかするから」

という野間に任せて、佐山は病院に行つた。点滴で元気になつたところで会社に連絡をいれると、秋山が自宅のマンションで遺体で発見されたという。もう一週間も来ていなかつたそうだ。

結局、不正アクセス、データ偽造の罪で、秋山は被疑者死亡のまま書類送検されることになつたが、自殺教唆に関しては立証できず、新聞にも数行しか載らないような地味な事件として処理された。

佐山といえば、始末書と多少のお咎めはあつたものの、以前の生活に戻つた。仕事もなんとか続けている。

あの死者の家で見かけたコーナーたちのように、生きているのに死んだ目をした人間を見かけることがある。現実でも リアルワールド の中でも。

「現実を見据えて生きない人間は、既に死んでいるのと同じなんだよ」

秋山の言葉がよみがえる。

そのたびに、佐山は自分に問いかける。

俺は本当に生きているのだろうかと。

しかし、それを問い合わせる限り、自分は生きてこるものだとも思つ
のだ。

『』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2513f/>

リアルライフ

2010年10月8日15時49分発行